

# 博物館だより

No.214

令和6年9月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行  
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13  
TEL 0930-33-4666  
FAX 0930-33-4667

博物館休館日カレンダー  
2024年9月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	1	2	3	4	5

休館日 ※情報はR6.8.23現在

◆博物館「イチオシ」逸品レポート  
この展示（&収蔵資料）  
ココが見どころ、ココがツボ!!

今年「みやこの先人」の一人、小宮豊隆の生誕140年の記念年です。小宮豊隆の弟子にして小説『三四郎』のモデル・漱石研究の大家とされる小宮ですが、漱石の輝きが強烈過ぎて、残念ながら彼自身のことはいまあまりよく知られていません。

この記念の年、「知の巨人」ともいふべき教養の人・小宮豊隆を当館注目の資料から調べてみませんか？



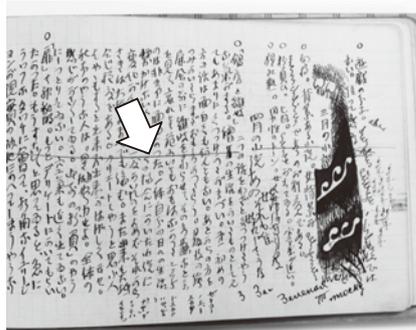
▲文芸欄を担当していた頃の小宮（明治44年・27歳）オシャレですね

### ●資料解説

漱石の発案で明治42年10月に始まった新進文芸の発表の場・朝日新聞文芸欄ですが、実際の運用や編集は門弟の森田草平・小宮豊隆のコンビが担いました。

欄の開始当初は漱石の目も行き届き、未熟な評論は漱石自ら紙上で、担当の小宮らの過誤を指摘する程でしたが、「修善寺の大患」を機に漱石の関与がなくなると、欄は二人の独断が先走りながら、喧噪的雰囲気の間となりまし。

これらが社内会議で問題となり、漱石の庇護者・池辺三山の引責辞任騒動へ発展したため、文芸欄責任者の漱石は欄の廃止と自身の辞職を決意し、その事を告知して二人を戒める



▲せっかく書いた評論メモに引かれた横線（矢印）と落書き

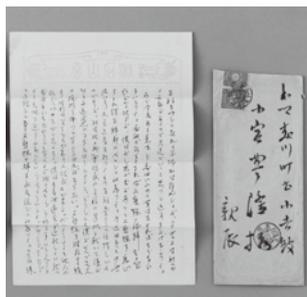
### ●資料名

- 小宮豊隆資料（第一次寄贈）一括のうち
  - ①小宮豊隆所用携行手帳より文芸欄評論×文
  - ②夏目漱石書簡（明治44年10月25日）
- データファイル
  - 分量等…①1冊 ②1点（封書）
  - 制作年代…明治44（一九二）年10月頃
  - ポイント…漱石のキツイ戒めがシヨックだった様子が偲ばれる
- 公開状況…保存のため通常非公開

手紙を小宮宛に送りました。

漱石に代り奮闘していたつもり的小宮はシヨックだったようで、評論×モに何頁にも亘る横線を引き、所在なげな落書きも記すなど「漱石のお灸」の衝撃がハンパなかったことを窺わせています。

※注1…漱石の辞表は、その後の池辺三山の説得により撤回された。



▲小宮宛の漱石書簡 便箋4枚に漱石の舌先に落ちた文章が綴られ「文芸欄はぶつつぶした方が君の薬」とある

## ◆講座・教室・催し物ガイド 9月の歴史講座

【漢詩紀行講座】

9月7日（土） 9時30分～

【古文書講座】

9月14日（土） 10時～

【古典かな講座】

9月21日（土） 9時30分～

【みやこ学講座】

9月28日（土） 10時～

※日程等変更となる場合があります。  
※見学会等は別途ご案内します。

## 博物館「職場体験学習レポート」のご紹介

博物館では8月1日（木）から2日間、豊津中学校からの職場体験学習を受入れました。

体験生徒は3名で「博物館の仕事」をバックヤードを含めて体験し、広報実習として体験学芸員レポートも作成頂きました。当館HPデジタルミュージアムで紹介していきますのでぜひご覧ください。



▲左：生徒作成のレポート。短時間で制作したとは思えない力作です 右：三重塔の防火設備点検体験で最上層へ登りました。体験生徒の皆さんお疲れさまでした!!

## 8月の業務日誌から

8月3日（土）、館内ホールで「昭和の暮らしと風景展」に因んだ「糸織り実演&体験会」が開催されました。実技はSILK LINE代表の林久美子さんに披露頂きましたが、「お蚕さま」の恵みを頂く仕組みの巧みさに感心の声があふきました。

8月4日（日）、大野城市と糸島市を対象に博物館文化財研修が行われました。大野城市では市の博物館で開催中の企画展「黄金の茶室と福岡のお茶」展を観覧。奥深いお茶の世界を堪能して、しばし猛暑を忘れることができました。



▲市民ミュージアム「大野城心のふるさと館」のホールで記念撮影



▲繭から生糸にする作業は不可思議の連続で大人も子供も興味津々

# みやこの歴史発見伝 170 文化財から学ぶ 「防災」

## 改訂されたハザードマップ

9月1日は「防災の日」です。昨年の9月1日で関東大震災から100年を迎えましたが、この震災を教訓として後世に伝え、防災意識を高めるために設けられたのが「防災の日」です。今年も、元旦に能登半島地震、お盆が近づいた先月8日には宮崎県から高知県にかけてマグニチュード7の地震が発生しました。特に先月の地震発生直後には「南海トラフ」の前兆を示唆するニュースが報じられ、関東大震災規模の地震や東日本大震災に匹敵する大災害の発生が現実味を帯びてきました。また7月には秋田・山形県を中心とした東北地方で豪雨災害が発生し、現在も、厳しい残暑の中で復旧作業が行われています。このように毎年、日本各地で「想定を超える規模の大災害」が



改訂されたハザードマップ  
(提供:みやこ町役場総務課)

多発していますが、これらの災害に對して一番身近な防災対策のひとつに「ハザードマップ」があります。これは自然災害により想定される被害の範囲を地図上に示したもので、被害の範囲を事前に周知し、迅速避難や二次災害の回避を目的に作成されるものです。みやこ町では本年、「防災ハザードマップ」を新たに改訂しました。このマップでは、豪雨等による浸水域や避難所の位置などが分かりやすく図示されています。今回は、このハザードマップの情報と併せ、町内の文化財にみられる古代の人々の防災対策についてご紹介いたします。

## 豊前国分寺にみられる「防災対策」

今から約1300年前の奈良時代、現在のコロナウイルスと同様に「天然痘」という疫病が国内に蔓延し150万人以上の人々が亡くなりました。同時に国内で戦乱が頻発したことから、当時の聖武天皇は、仏教によつてこれらの疫病や戦乱を鎮めるため、「奈良の大仏」で有名な東大寺を「総国分寺」として、国ごとに建立を命じた寺院がある「豊前国分寺」は、豊前国(現在の北九州市から大分県宇佐市に及ぶ行政範囲)の国分寺として建立され、当時は七重塔がそびえる壮大な寺院であったとみられています。

す。聖武天皇は天平13年(741)2月14日に「国分寺建立の詔」(天皇の命令を伝える公文書)を発布します。これは各国の国分寺造営にあたり、その目的や規定の詳細をまとめたもので、国分寺建設地については「好き地」に建てるとを命じています。この「好き地」の地理的条件として「見晴らしの良い地形で、水害のない場所」、「その国の行政を司る国府(現在の都道府県庁にあたる施設)や官道(奈良時代に情報伝達を目的として整備された幹線道路)に近いこと」などを挙げています。今回改訂されたハザードマップで豊津地域にみられる国分寺、国府跡の立地を確認してみると、いずれも想定される水害の浸水域ではなく、また宇佐に延びる官道を挟んで国分寺、国府が位置していることから「国分寺建立の詔」の条件を満たしていることが確認できます。またこの当時、国分寺は、国府の建物と併せ、その国では最大の建築物であり、特に赤く彩られた七重塔は、国の中で最も高い建築物のひとつであったとみられ、国内外の人々を魅了していたことが想像できます。

現在、浸水域のシミュレーションはコンピューター、地盤の強度はボーリング調査などで確認できますが、古代の人々は、当然、これらの機材を用いることなく、災害に強い土地を的確に選んでいることが伺え、1300年前に豊前の人々が北九州市から宇佐市の行政範囲の中で「最も安全な場所」として豊津の地を選び、豊前国分寺や国府を造営したとみられています。さらに、奈良時代以前に造られた勝山地域の橋塚・綾塚古墳は、発掘調査等によつて、いずれも強固な地盤上に築造されたことが確認でき、地震災害に對して選地が行われたことが伺えます。

## 1000年に二度の災害

昨年7月に発生した豪雨により、犀川帆柱にある国指定重要文化財「永沼家住宅」の裏山から土砂が家屋に流れ込む災害が発生し、その復旧工事が本年7月に完了しました。さらに本年7月の豪雨では、愛媛県の国指定史跡「松山城」で、城郭の一部が崩壊し、人的被害が発生しています。また8年前に発生した熊本地震では熊本城が甚大な被害を受け、熊本県内にある約1500年前に築造された各種の装飾古墳も被害を受けています。

近年、このように1000年以上にわたり、今日までその姿を留めてきた各種の文化財が一瞬にして崩壊するような災害が頻発している状況を見ると、現在「最悪の事態」として想定されている「1000年に一度の災害」も決して大げさなものではないと、明日にでも起こりうる状況であることを認識させられます。夏目漱石の小説「三四郎」のモデルといわれる、みやこ町出身の小宮豊隆と特に親交のあった物理学者「寺田寅彦」が「天災は忘れた頃にやってくる」という警句を唱えてから約1000年が経過した今日、寅彦に因んで作られた「天災は忘れる間もなくやってくる」という新たな警句が大規模災害に對する備えの重要性を物語っているように感じます。



永沼家の被災状況(左)と復旧工事後の状況(右)

(井上信隆)